

恩師吉田仁志先生を偲ぶ

昭和2年5月8日北海道上川郡名寄町に生まれる。昭和28年3月に北海道大学理学部化学科を卒業、引き続き同大学大学院に進学、33年7月に同大学理学部化学科助手に任じられる。37年5月同大学理学部助教授、49年5月に教授に昇任。平成3年3月停年により退職、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与される。昭和53年から1年間はカナダNRCにておいて研究に従事。また、在任中北大評議員、昭和64年には教養部長として教養部改革に取り組んだ。昭和63年日本分析化学会学会賞、平成19年勲二等瑞宝中綬章を受章。



本会名誉会員である吉田仁志先生が、平成27年12月11日逝去された。先生の教えを受けたものの一人として心から哀悼の意を表したい。

吉田先生が亡くなられたとの知らせを受けたのはタイのバンコクに滞在中のことであった。知らせてくれたのは研究室の先輩である道立衛生研の神和夫氏。既に親近者のみによって葬儀等は終えられたとのことであった。2、3日後に帰国し、札幌在住の研究室の同窓生とともに先生の自宅にて焼香させていただいた。その際、祭壇に飾られた吉田先生の写真が優しく我々を迎えてくれた。

亡くなる2年ぐらい前、「ホー！吉田です。これから行くからな。」と電話があり、しばらくすると私の研究室に來られて、大学の教育や日本の将来を危惧するお話しをされた後、大学の近くで一緒に昼食を取った。帰りかけ、「先生、そろそろ車の運転は止められてはどうですか。」と言うと、「そうだな、そろそろ止めるよ。」、これが先生との最後の会話となった。

先生の研究は、比色試薬の開発や温度滴定法など分析化学の根幹をなすところから、ボルタンメトリーや等速電気泳動など、その当時の先端的手法も取り入れながら精力的に進められた。北大の研究室でありながら、北大以外の大学の出身者が圧倒的に多い特殊な環境で、常に学生と対峙しながらの研究生活を続けられた。先生はまた、分析化学会を、特にその支部である北海道支部をこ

よなく愛されておられた。支部の活性化のためにセミナーや出版事業を開始され、これらを実に楽しそうに運営してこられた。支部長はもとより第37年会の実行委員長として年会を盛会裏に実施された。これらの活動の幾つかには、当時まだ助手の若造であった私も参加させられ、支部や本部の大先生と同席させていただくことも度々あった。緊張の連続ではあったが、大先生たちが普段は見せない意外な面を披露してくれたりして楽しくもあった。

吉田先生は現役時代周りから「元帥」と呼ばれていた。学内の教員からだけではない、分析化学会の学会でもそう呼ばれることがあった。明らかに吉田先生よりも年上の、いわゆる学会の「大物」が吉田先生を元帥と呼ぶのを聞いて、何か不思議であった。なぜ元帥と呼ばれたのか。その本当の理由を私は知らないが、その決断力と階級（軍隊的）にとらわれない人の使い方であったのではないかと私は思っている。

先生は、教育・研究を通じて多くの人材を育成し、先生の教えを受けた多くの方々が現在大学や研究所、教育界で活躍している。彼らとともに先生のご冥福を心よりお祈りしたい。

〔北海道大学大学院地球環境科学研究院 田中俊逸〕